

リアルオプション・アプローチによるリスクマネジメントの考察

—オペレーショナル・リスクの定量化手法—

文教大学大学院情報学研究科情報学専攻
板谷 英治

概要

アメリカのエネルギー大手エンロンが粉飾決算により倒産したのは2001年であった。2006年には映画化され、改めて企業価値や本質的な企業のあり方が見直されていることを痛烈に感じた。日本においても、IT企業が他の既存企業を追い越すかのごとくメディア等で騒がれた。現時点では、何らかのバイアスがかかり、株式公募時の目論見書に記載されていたキーパーソンである経営者の失脚により倒産に近い状況となっている。このような状況下、企業は以前にも増して、ゴーイング・コンサーンのもとに利益を追求し、ステークホルダーとの関係を保つために社外活動に精を出している。しかし、漠然とした企業の開示情報や戦略だけでは一向に企業の体質改善は行えずに衰えていってしまう。業務自身を再認識し、リスクマネジメントを行い、ベンチマークに基づき業務設計上の重要な活動が必要であると考察した。

近年相次ぐ我が国の企業不祥事は、企業の倒産や企業のブランド価値の崩壊等といった事態により発生する経済的損失だけでなく、国民の安全・安心をも脅かす状況を生み出している。そのような企業不祥事の発生を防止するための企業活動を促進することは喫緊の課題となっている。また、企業不祥事を防止するための企業活動を促進することは、世の中に伝えることにより達成される。株主・投資家をはじめとしたステークホルダーからの厳しい視線や意見を受け、ステークホルダーとの良好な関係を保ちつつ、持続的且つ健全に企業が成長していくための土台となる。言うなれば経営力の基礎となるものであり、企業の収益力や競争力の向上を含めた企業価値の維持・増大につながるものである。言い換えれば、健全な企業の体力（経営の質を含む経営力）なき企業の成長や持続的発展は望めない。企業価値の向上は、企業不祥事を防止するための活動、仕組、工夫が必須とも言える。企業不祥事の防止に代表される企業価値の毀損の防止という統制活動に加え、企業の収益力・競争力向上の側面における企業価値の維持・増大を図らなければならない。積極的な評価を得るために、将来の利益をいかに生み出して企業の価値を高めていくかという観点からの取組を行っていくことが重要である。

本論文では、コーポレートガバナンス、リスクマネジメント、内部統制の考え方について粉飾決算などの企業不祥事による倒産を防止するための統制活動を定量化することを考察する。企業のリスク管理・内部統制に加えて、コーポレートガバナンスの確立の重要性という観点から、企業に内在するリスクに着目する。その上で、グループ企業を含む企業集団全体を対象として、企業経営者がコーポレートガバナンス及びリスク管理・内部統制を構築して、株主・投資家等をはじめとしたステークホルダーに開示する際に参考となる指標を見つけ出す。リアルオプション・アプローチにより定量化されたリスクを用いて、定義、評価することにより、企業のリスクを統制できる業務設計と注目すべき統制活動を見つけ出す。さらに、企業の開示情報として利用できるリスクマネジメントの指標を策定することを考察する。